

特集「ケインズとその時代を読む II」

序

大 瀧 雅 之

本特集「ケインズとその時代を読む II」は、その名の通り、前年度の「ケインズとその時代を読む」の続編である。ここで言う「その時代」とはケインズが壮年に達し、イギリス政界・学会で重きを置くようになった 1920 年代から 40 年代のことである。本編では、ケインズの一世代後の E.H. カーの著作二冊も取り上げられるが、その一冊である『危機の 20 年』もまさに、この 30 年の後ろの 20 年を指している。すなわち、第一次大戦後から第二次大戦に挟まれる所謂「戦間期」は、資本主義・市場経済が現在に匹敵するほどの危機を迎えた時代なのである。

第一次世界大戦後の特に大陸ヨーロッパは、戦災により壊滅的打撃を受け、ドイツでは飢餓・餓死が強く懸念されただけでなく、戦費調達の結果生じた莫大で複雑な国際的貸借関係の清算問題を抱えていた。主だった貸借関係は、アメリカが超大型の債権者となり、イギリス・大陸ヨーロッパが債務者となった関係である。神藤浩明教授の解題による『平和の経済的帰結』はまだ少壮であったケインズが、こうした戦勝国間の貸借関係の清算を、敗戦国で今や何の力もないに等しいドイツへの賠償金に求めようとした、ベルサイユ条約に強く反対した様が、時に政治家の戯画も交えながら、過激な調子で綴られている。

では一体ケインズは、ベルサイユ条約の向こうに何を見たのだろうか。もちろん人道に悖る過酷で半ば非現実的な賠償金自身への悲憤慷慨もあったろう。しかし優れた大局観の持ち主であるケインズを動かすには、些か動機として弱いといえよう。これは編者のスペキュレーションであるが、ケインズの脳裏には、ドイツの東方すなわちロシア革命によって誕生した社会主義国ソビエト連邦の存在があったと考えるのが自然と思われる。『説得評論集』にもケインズ自身のソビエト観が綴られているが、なんといってもイギリス人のロシア研究といえば、カーである。塩川伸明教授の解題による『ロシア革命：レーニンからスターリンへ (1917-1929)』は、カーの長年の研究の縮刷版であるが、そこでは中央集権経済の懐疑が婉曲ではあるが、明確に述べられている。この特集では、塩川教授のご

専攻であることもあって、この縮刷版のもととなった全14巻にわたる『ソビエト・ロシア史』まで詳しく解説戴いた。この場を以てご厚意に深謝申し上げたい。

さらに若手の本橋篤氏の解題による、同じくカーの『危機の20年』は、第一次世界大戦の悪夢にもかかわらず、なぜ欧米諸国の国際協調が上手く運ばず、再び大きな大戦を引き起こさざるを得なかったかが綴られた書物である。編者がみるに最も重要なのは国際社会における「リアリズム」であろう。本橋氏の言葉を借りれば、

「「リアリズム」の観点から見た政治の本質が権力を背景とする以上、国際政治においても、「権力不可分説」が重要な役割を占めることは明らかであろう。「権力不可分説」は、政治単位を軍事力・経済力・意見を支配する力の3要素が不可分で存在する範囲（実質的には国家単位）に規定し、国家を超えるような国際連合体に過度に依存した平和維持プロセスの構築に警鐘を鳴らした。」

である。二度の大戦を経験したカーが、現在の世界（日本を含む）の安全保障問題の迷走ぶりを見たとき、必ずや彼は皮肉な笑みを漏らさざるを得ないであろう。

内山勝久氏による高橋亀吉・森垣淑による『昭和金融恐慌史』は、日本人の手による「日本の危機の20年」の分析で、『ケインズとその時代を読む』で取り上げた薄井充裕氏の解説による『石橋湛山評論集』の姉妹編あるいは経済編と呼ぶべきものである。高橋・森垣両氏によれば、1927年に起きた昭和金融恐慌は、極めて根が深く第一次大戦（日本は戦勝国として漁夫の利を得た）に遡るといふ。内山氏の解説によれば、

「結局、政府・日銀の採った鎮静化対策は大規模な金融緩和であり、金融調節手段のみでなく、資金の円滑な融通のための救済融資を行ったりもした点が、1920（大正9）年恐慌の救済措置の特色であった。しかし、この各種救済措置は、必要とされる企業や銀行の抜本的整理を前提としたものではなかったため、不良企業や不良債務が温存されることとなり、単なる糊塗弥縫策に過ぎなかったというのが著者の評価である。

こうした安易な救済策がもたらした弊害も大きい。第1に、日銀の救済銀行化により財界の政府に対する安易な依頼心を高め、放漫経営を助長したこと、第2に、企業救済が政治的判断により実施されるようになり、政財界の関係がより濃密になっていったことである。こうして財界整理を躊躇したために、銀行には回収不能の債権が累積していくという悪影響を残すことになり、こうした状況は「財界の癌」とよばれるようになったと筆者は論じる。」

である。今日の金融当局の責任者の頭脳には、こうした歴史的教訓なぞ欠片もないのではなかろうか。QE政策あるいはQQE政策と呼ばれる、異様な金融緩和の正体と結末をここに見るのは、ひとり編者だけであろうか。

さて掉尾の大瀧による「フランク・ラムゼー覚書」は、現実の政治・経済が対象となっているこれまでの作品に関する解説とは、些か色彩を異にする。この小論は、ケインズの『人物評伝』、ラムゼー自身の『哲学的論文集』所収の「真実と確率」というエッセイ、及び、実際に原典を読んだ人は極めて稀という意味で経済学者には名ばかり高い、最適成長理論の嚆矢「貯蓄の数理的理論」の三つの素材から取材して、学問的観点から稀代の天才ラムゼーをスケッチしようという、無謀ともいえる試みである。読者に感得して戴きたいのは、ラムゼーの温かい心と血の通った学問とは何かということである。そして本来、論理のキレとは、難しいあるいは複雑なものを、簡単な要素に還元し単純化させる能力を指すことを実感していただければ、これに過ぎたる喜びはない。

